

対清韓政畧

0004

戦甲一 (一) 六月二日

○朝鮮孤兵之関スル我内閣ノ決議

朝鮮國乱氏内ニ起リ京城駐在公使館より、來電ニ據ルニ官兵頻ニ敗レ乱民益猖獗ニ窮ナリ
弊より去リ將來乱民京城又ニ其他、日本人居留地ニ侵入スルヲ保テ難ク統テ公使館及國民ヲ保
護スル為メ兵員ヲ派遣スルノ必要アリ

天津条約第三款ニ依レ朝鮮國変乱又ハ重大事件アルニ當リ日支兩國又ハ一國兵ヲ派遣スルモハ
行文知照スヘシト明文アリ故ニ出兵ニ當リ將來或ハ清國ト往復關係スルヲ妨楅ヲ生スルヲ料レカ
スト虽モ今救フ事ハ急速ノ事変ニ係リ我兵ヲ以テ我國國民ヲ保護スルヲ急ルヘカガルカ為メ清國
ト聯合派兵スルヲ待タズ條約ノ明文ニ從テ行文知照シ直ニ出兵スルヲ適當トス

京城駐在公使館杉村書記官より、來電ニ依レバ朝鮮政府ハモ應援ヲ清國ニ求メタリト云フ
清國ノ之ニ應シタリ吾々未タ報知ヲ得ズト虽モ將來清國モ其兵員ヲ派遣シ兩國ノ軍隊或
ハ聯合シ勦ヲ為シ或ハ朝鮮政府ノ要求ニ由リ臨楅ニ應援防護スルノ必要ヲ生ズモ亦料レカ
此レ亦豫メ算圖ノ中ニ置カサルヘカラン

0005

今更ニ詳報ヲ得シヲ待タズ先ヅ第一ニ公使館及國民ヲ保護スルノ必要ヲ主トシ概先ニ後レガレ為シ
及バダケ速ニ出兵ノ準備ヲ為スベシ

0006

軍一(1)

明治三十七年六月五日

○外務大臣より大島公使へ與へたる刻令

一五日、朝鮮國に歸任の大島公使に與つる刻令

今般閣下朝鮮京城、御歸任相成候上左記ノ件々御心得置
御遵行相成度候

一 目下朝鮮國內、起る所ノ変紀、一層其ノ區域ヲ擴メ帝
國公使館領事館及居留帝國臣民ノ危險ヲ及スル虞アリト
認ムルハ其ノ旨直ニ電報セラル可キ

一 変紀ノ情形如何、拘テ清國政府より兵員ヲ朝鮮國ニ派遣ス
可キ情形確ヤリト認ムルハ其ノ旨直ニ電報セラル可キ

前記二項ノ場合ニ於テ帝國政府、直ニ兵員ヲ派遣スルハ尤モ日
韓ノ關係ハ明治十五年濟物浦條約第五款及明治十八年七月十
八日高平臨時代理公使ノ知照ニ基因、又日清ノ關係ハ明治十八

0007

年天津條約第三款、手續ヲ經テ出兵スルモノ心得ラレ可キ
但シ閣下ノ着任前、雖モ帝國政府ハ在京城杉村臨時代理使
ノ報告、據リテ出兵スルモノ可キ

一帝國政府出兵ノ目的ハ帝國公使館領事館ヲ護衛シ及ビ居留
帝國臣民ヲ保護スル爲ナリ、雖モ若シ朝鮮政府ニ於テ變亂鎮定
ノ爲、帝國兵力ヲ援助スルハ該地出張ノ帝國陸軍總指揮
官ト協議、上朝鮮政府ノ請求、應ゼラレ可キ

一帝國兵員ノ容ヘ可キ警告ハ濟物浦條約第三款ニ據リ朝鮮政
府ヲシテ之ヲ設置修繕ノ責ニ任ゼラレ可キ、但シ若シ該政府ニ於
テ適當ナル設備ヲ爲シ能ハサルハ兵員駐屯ニ便宜ナル場所
トモ貸與セラル可キ

一帝國兵員ニシテ若シ清國兵員ノ同リ一地ニ駐屯スルハ若シ天
リ朝鮮政府ノ請求ニ由リ戰地ニ出陣スル場合、彼此衝突ス

引起せん様十分意ヲ用ヒラハ可キ

一 若シ清國官吏より我カ出兵ノ理由ヲ問ヒタルハ天津條約第三款、照シ朝鮮國內ニ變紀アリ帝國公使館領事館及ヒ居留帝國臣民ノ性命財産ニ危險ヲ及ボスノ慮アリ因テ出兵シタルモシテ談條約ノ定ル所ノ道ニ業已清國政府ノ行文知照セリト對シラハ可シ而シテ若シ又尚ホ其上ニ詳問セシトスルハ於テハ直ニ帝國政府ニ向テ詳問セラルハ可シト旨ヲ對シラルハ可キ

一 若シ又京城駐在外國官吏より我カ出兵ノ理由ヲ問フモノハ帝國政府ハ濟物浦條約第五款及ヒ天津條約第三款ノ據リテ出兵シタルモノニ決シテ他意アリナキ旨ヲ保證セラルハ可キ

一 凡シ民京城ニ闖入スルニ當リテ朝鮮政府ニ於テ該地ニ在ル各外國公使館領事館及ヒ外國人民ヲ保護スルカキニ因リ各國使臣若シハ領事より我カ衛護ヲ乞フハ該地出張ノ陸軍總指揮官ニ協

0009

議シテ可及的ノ衛護ヲ與ヘテハ可ヤ

一 在ノ外茲ニ引記セザルノ事項ニシテ急速ヲ要シ電訓ヲ請フハ暇
ナキハ閣下ニ於テ臨機處分セザルハ可ヤ尤モ此ノ場合ニ於テハ後
電信又ハ書信ニテ速ニ事狀ヲ具報セザルハ可ヤ

右反訓令候致具

二十七年六月四日

0010

軍一ノ

明治二十七年六月八日

○清政府ノ陰謀

一八日上海領事より陸奥外務大臣宛報、確ハハ筋より聞込ミタル所ニ據ルハ清國政府ハ月下ノ機會ニ乘リ朝鮮國王ヲ清國ニ連行朝鮮ノ國土ヲ清國ノ一省ト宣告シ李經芳ヲ其ノ總督ニ任スル企アリト云リ

清國政府ハ日露兩政府ノ外ハ之ニ反對スルモノヤハ可シト思惟セリト本件ニ関シテハ何卒深ク御勘考アラシテテ希望ス

(本文ニ確ナル筋トハハ何如ナル人ヨリ聞キタハカ直チニ回答ス可キ旨只今電信ヲ以テ問合中ナリ)

大本營

0011

軍一(一)

明治三十七年六月八日

○清政府、陰謀、関スル上海領事ノ回報

一上海大越領事ヨリ外務大臣宛報

清韓問題ヲ熟知スルヤンハイマルキリ、新聞ノ前記者オーシー、稱ス
ル者ヨリ本官、語りしナリ、同人ハ或清官ヨリ聞キタル由ナリトモ其ノ姓
名ヲ明言スルコソ肯セズ

大本營

0012

戦甲一(四)

六月十三日午後九時四十分

○義成、牙山、清兵内地ニ進入セズト明言ス

外務大臣宛

大島公使

義成曰ク清兵内地ニ進入セズト猶未ク牙山ニ在リ賊軍ハ六月十日六日土日金州ニ敗北シ金堤ニ逃走セリ

大本營

0013

軍二(1)

明治三十七年六月十四日

○袁世凱及ハ各國公使ト談話、要領

一六月十四日京城ニテ福島中佐上原少佐ノ商、袁世凱及ハ各國公使ヲ訪問シ其ノ要領ヲ參謀總長ニ報シタル信書

六月十四日袁世凱及ハ各國公使ヲ訪問セシ要領左ニ申上候

袁世凱

湖南ノ人リ長毛賊亂ノ談等アリ轉シテ今回東學黨騷亂ノ事ニ及ビタルハ官等ノ問、答ニテ曰ク清兵二千許東學匪徒鎮壓ノ為メ牙山地方ニ上陸スルハ賊兵傳ハ聞テ以テ既ニ潰レ全州一帶既ニ韓軍ノ克復スル所トナリ清兵牙山地方舍營スルノ家ナク水邊ノ幕営雨季ノ困難兵卒頗ル無事ニ甚ク居リリト然レ、昨夜左ノ公電ニ接セリ

牙山駐屯ノ清兵中韓軍ハ一昨十三日葉軍ハ昨十四日ヲ以テ

袁世凱
河南項城
縣人
河南人

牙山ヲ發シテ公州ニ向リ巡邊使李元會ハ者賊兵既ニ解
散スルノ故ヲ以テ葉帥ニ出兵ノ見合ヲ請ヒタシ氏葉ハ既ニ皇命
ヲ奉スル上ハ親シク賊勢ヲ見ヘテアラサシハ兵ヲ班ヌヲ得テ
斷言ヤリ云ク

此ニ於テ實況偵察シテ先着大隊中ノ一士官(有吉步兵中尉)
ニ公使館附譯學生一名ヲ附シ今朝牙山公州地方ニ向テ出發セ
シノ事ナリ京城ヨリ牙山ニ至ルニ二日程ニ確報ヲ得ハ一週間内ニ
存シ可シ袁世凱ハ兎ニ角御承知ノ通りノ一人物ナリ支那派
義ノ策モリ固ヨリ信ス可カラズ且ツ決シテ許ス可カラズ

彼ニ清兵發遣ノ時ニ當テ以テ今ヤ日本ハ政權ノ爭奪ニ及
ビテ他ヲ顧ムノ暇ヲナス終ニ清國ニシテ兵ヲ出スル日本焉ソ
能ク兵ヲ出ヌヲ得ニト自ラ信シテ疑ハハ析析豈圖ラシ日本渡韓
ノ迅速ナルヲ見テ一驚ヲ吃セハ事實ニシテ其ノ狼狽笑ヲ可シ彼

既に己ノ想像ヲ誤ヘテ以テ奇計流言ヲ以テ我カ方針ヲ阻害セシ
トテ試シトスヘハ彼ノ策士ノ慣手段ナリ最モ注意ヲ密ニ斷乎
トシテ動カサシテ實ニ急務ト敍存候

雖モ此度清兵ノ間ニ衝突ヲ來スナキモ今回我カ軍迅速ノ處
置ハ他日彼ヲシテ輕率ニ兵ヲ朝鮮ニ動カサシトス且ツ太ニ彼ヲシ
テ戒心スル所アラシムニ至リタリハ國威ノ發揚ニ関シ大ニ利益
ト被存候唯此利益ヲ全フスヘハ實ニ結局ノ處置如何ニ相関
シ候儀ニ付豫メ篤ニ御熟考相煩シ度小臣等モ全カヲ尽シテ
公使ヲ翼賛可仕候

英公使

曰ク貴國ノ軍隊韓京ニ入り有事ノ時我々モ保護セシムル
ハ大ニ喜ブ所ナリ然レハ保護ノ必要ナキニ至ラシハ更ニ希望スル所
ナリ今ヤ賊勢日ニ衰ヘ京城又頗ヘ平穩ナリ云々又曰ク近報ニ據

ハ賣國ハ更ハ十大隊ノ兵ヲ進發スル信ナハカ又曰ク大島公使
ヲ訪問シタケレバ此頃ハ御繁忙ナラシメ寮入ラ差ホレ居リ御
閑暇ニモナラハ御尋エ可シ宜シク傳ヘラレヨ

楊逸代理公使

訪問ノ際類ニ報告ヲ誌ス居リ曰ク此頃ハ諸君等ノ為ニ頗
ル繁忙ナリ又曰ク金羅道一帯ノ賊勢大ニ衰ナリ又顧慮
スルヲ要サレ可シト

米國公使ヲ訪問セシ際米國東洋艦隊司令長官某及ニ露國代
理公使アリ互ニ情報交換ノ談話中ナリ佛國公使ハ不在ニシテ
面會セズ

是ヨリ先々流説アリ曰ク露國ハ浦港兵ヲ元山ニ進シトス曰ク露
佛兩國韓延ニ説テ各其ノ兵ヲ韓地ニ出サントス云々固ヨリ信ヲ置
クニ足ラズト雖モ東京西比利亞ノ兵勢ヲ詳ニセザル者ハ勤マズハ

此等可笑ノ流言ニ顧慮スルナキヲ保セス是又注意ス可キ事ト
被存候終シ又我軍ノ進退ヲ好害セシムルノ目的ヲ以テ眞ニ此
事ヲ發言セシト假定スルモ彼等何ヲ以テ之ヲ實行スルヲ得ルカ東京
ノ兵ハ僅ニ東京ヲ鎮壓スルヲ得ルニ又他ヲ顧ルノ餘カラ有セス又
露國沿岸州ノ兵備ハ僅ニ琿春甯古塔ニ對スルヲ得ルニ交通
不便ノ今日ニ在リ日清ト並テ朝鮮ニ出兵セシムルハ如キハ斷シテ
爲シ能ハサルノ事ノモ若シ又之ヲ爲セシカ僅ニ數大隊ノ兵ノミ決シ
テ恐ルニ足ラス此邊ハ斷乎シテ御配慮無之様切望仕候而
シテ此流言ハ袁世凱ノ口ニ出タリトテ其他英米獨ノ如キハ今
回ノ事件ニ關シ深ク慮テハ掛ケサル様相見ニ候
今回勦兵ノ迅速敏活ナルハ獨リ李鴻章袁世凱等ノ心腹ヲ
寒カラシメタルニミナラス其他ノ各國人々シテ我カ軍械ノ如何ヲ測量
スルノ猶豫ヲ得セシメテ彼等ヲシテ幾ト果然タラシムルニ至リタル

ハ實ニ爽快ニシテ國威ノ發揚將來ノ利益尠サナラスト確信仕候

0019

軍二(1)

明治三十七年六月二十日

○清國出兵ノ非難

一六月二十日天津神尾少佐よりノ報告

今回、朝鮮事件、就ハ外國人ハ一般、李鴻章ノ行為即チ出兵ヲ非難ス、其ノ説ハ曰ク、朝鮮國王より援兵ヲ請ヒトスルハ素ヨリ虚構ノ事ナリ、其ノヤ之アリトスルモ袁公使ノ喉使、出ツ朝鮮國王ノ本意ミダサハ可シ要スルモ此回出兵ノ非難ハ袁公使ノ主謀ニ出テ李鴻章之ヲ遂行シタリト又北京政府ハ此、出兵ニ不同意ナリト今ヤ一般ニ唱道セラル其ノ説ハ曰ク、出兵主唱者ハ李鴻章及テデットリシグ氏天津税関長、其ノ實本ノ顧問官ナリ之、反對シテ一方ニ立ツハ北京政府(重ニ總理衙門)及ヒロバートハート氏英人總稅關長、李氏政變論中々盛ナリト要スルモ此回出兵ノ舉ハ諸外人ノ一般ニ是認セサルナリ

又駐韓露國公使ウエバー氏ハ北京公使代理トシテ來任ノ途次本
月八日李氏ヲ訪問シタリ時出兵ノ非舉ヲ極言セリト云フハ事實
ナリ是等ノ事情ノ爲メ李氏モ自分ノ非舉ヲ反省シテ賊勢ノ衰
減ト我國ノ出兵トヲ聞キ遠ニ撤兵ヲ希望タリハ事實ナリ葉提
督出發ノ際電請セシ歩兵三百騎兵五十ノ續發及ビ雨衣ノ續送
等ヲ中止シタリハ即チ其ノ事實ヲ證スルニ足ル
然レモ事情一轉シテ本邦トノ交渉ト爲リシ後本月十七日ヨリ十八
日ニ至リ間ニ於テ李ハ左ノ決心ヲ爲シタリモノ如シ
寧ニ兵力ニ訴フルモ自説ハ枉リヘテ能ハス

軍二(1)

明治二十七年六月二十二日

○清國ノ決心

一六月二十二日天津神尾少佐よりノ報告

李鴻章ハ事情一轉本邦トノ交渉ヲ為リ、後寧ハ兵カニ訴フニ
自説ハ枉リハテ能ハス、決心ニシテモ、如ク直ニ左ノ處置ヲ為
ミタリ

一衛汝貴及ヒ吳育仁、兵ニ出師準備ヲ命じ、北洋海軍ニ
北洋沿岸一帯、戒嚴令ヲ布ケリ

二前託西將官ヲ朝鮮ニ派遣スルノ奏請

三朝鮮國王、左ノ如ク電報セリ

英、日本兵ツ兵ヲ撤セサレハ我々亦兵船陸師ヲ送り其ノ爭ハ

シ爾ノ國危シ
原文ヲ得ルニ、アラス其ヲ
一見シタルモノ、筆記ニ據ル

本月二十日駐劄北京ノ露國公使帰國ノ途次李氏ヲ訪問シ時李

ハ先ツ口ヲ開キ此回ノ件ニ就キ朝鮮ノ事端ヲ生ズルモ支那政府其
ノ責ニ任セヌ日本不正ナルハナリト言ヒテ云フ

本報告執筆中左ノ報告来リ

芦名及山海關ノ兵三百名ト馬七十ハ今日二十日塘沽ニ於テ汽船海
定號ニ乗リ今夕ノ滿潮ニテ出帆唐山ノ向テ此兵ハ地雷及水雷ヲ
携行ス小銃及北塘ノ兵ハ未タ李ノ上奏ニ對テ勅諭ヲ得ヌ故ニ
未發ナリト

0023

軍二(ノ)次

明治二十七年六月三十日

○日清ハ交渉

一六月三十日午後二時十分天津發神尾少佐ヨリ參謀本部宛
盛字軍及ヒ一般ノ情況ハ先日ニ異ナラズ李氏ノ仲裁ヲ露國
公使ニ頼ミシハ實ニハ好シ

大本營

0024

軍二(ノ)

明治三十七年七月一日

○日清韓ノ文涉

一七月一日午前十一時四十五分發京城大島公使より外務大臣宛

内密ノ手段ヲ以テ聞得タル所ニ據ルニ李鴻章ハ左ノ如キ電報ヲ朝

鮮政府ニ送リト

諸外國ハ今後朝鮮ニ於ル日本行為ヲ非難ス日本ハ進退在

レリ

清國ハ日本ヲシテ其ノ兵ヲ撤回セシム可キハ朝鮮政府ハ大島より

何如ナル提議アリ是ニ耳ヲ傾クニ勿レト

在ノ電信ハ全ク朝鮮ヲ欺カシカ者ニ流傳セラルヘモノ故閣下ハ我兵ヲ

支那兵ト同時ニ朝鮮ヨリ撤回セシサレシヲ望ム袁世凱ハ七月一日

午前公文ヲ以テ聶提督ノ宣言ハ實アリト答ハリ

聶提督ハ
袁世凱ノ誤
アリハ甚大
アリ

大木 啓

0025

清國の明治廿七年七月二日

○清國の内意

南田秀松宛 堤 虎吉

李鴻章の関戦ヲ欲セス魯公使ニ調停ヲ依頼シタリ

劉銘傳の出師ニ當リ我ヲ要セハ出軍スベシト申出タルニ李は之ニ命ヲ待
タシメタリト云フ

鎮遠清遠揚威平遠重慶朝陽等

大木 啓

0026

軍二(一)

明治三十七年七月二日

○清國政府開戰策ヲ採ル

一七月二日午前十一時五十六分發天津荒川領事より外務大臣宛

清國政府ハ李鴻章より建議ニ基キ開戰策ヲ採用シタルモノナリ

清軍將來上陸ノ場處ハ大同江ナリ可シ出發ノ準備整ヘ今當

命令ヲ待テ居リ

大本營

0027

軍二(ノ)

明治三十七年七月三日

○日清ノ交渉

一七月三日午前十一時芝罘發井上少佐より軍令部長宛
日本政府數歩譲り後ナクバ支那開戦決心準備せりトノ電信
李鴻章より道台昨日受取濟風詭天津北京注意ナシ置リ今日
飛虎號ニテ支那官吏家族多人數芝罘帰着

大本營

0028

瀋(一) 明治廿七年七月九日

○清國政府状況

角田秀松宛 堀 康吉

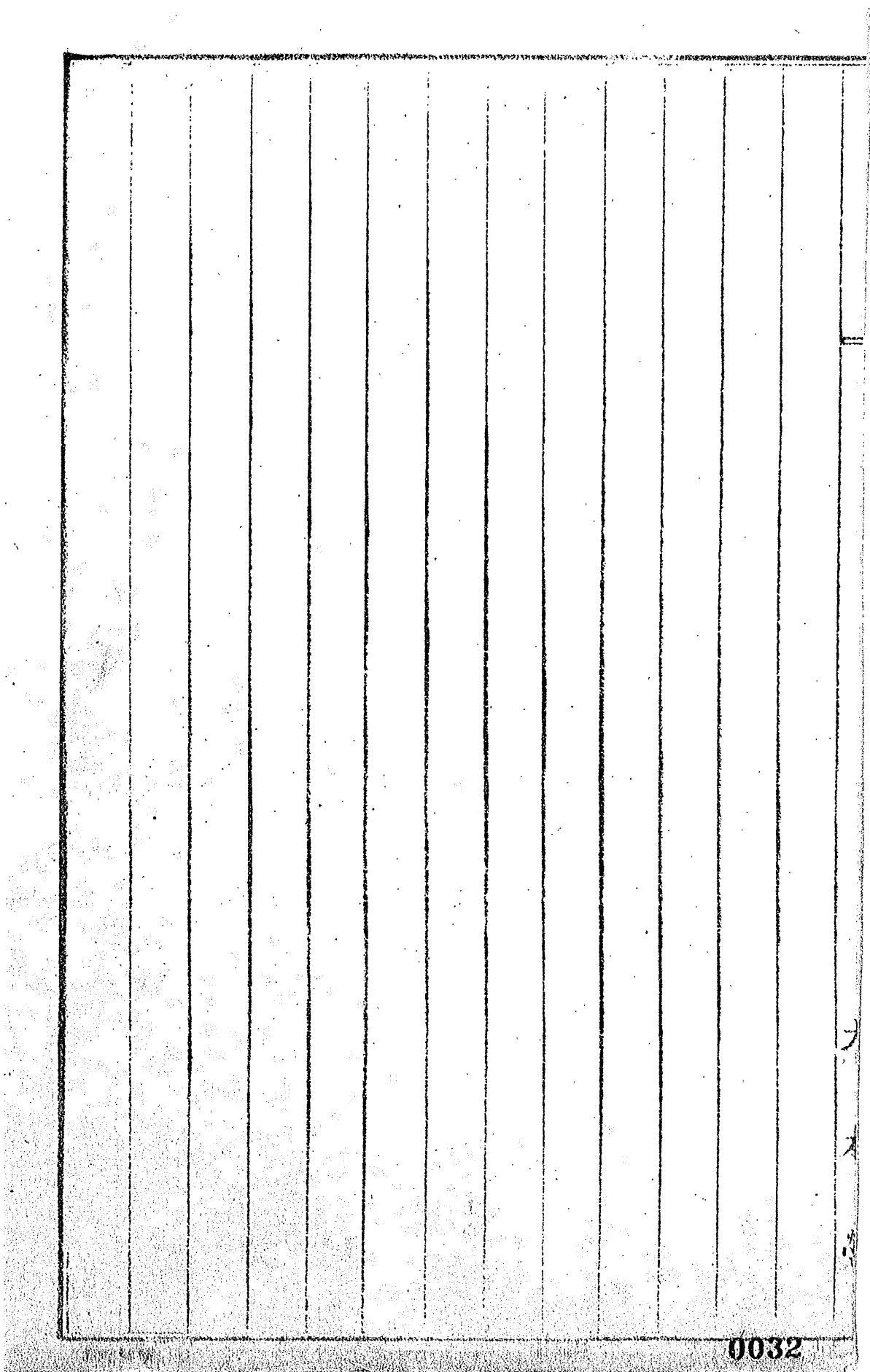
目下清國情況ヲ案スルニ李鴻章ハ從來ヨリ關係上今更チ引リ能
ワズ本邦讓ルナランバ千戈ニ訴フルモノ目的ヲ達セントハ同人當時腹案
ナルガ如キト雖モ内ニ萬壽慶典ヲ等ヤリテ内廷更ニチヤヤ動カスヲ解
マズ北京政府中ニモ李行處ニ反對シ批難スルモノアルニテ今愈々開戦ノ曉チ
上將タル名望ヲ有スルモノニ走レテ兵力ヲ充分ノ勝算ナキハ勿論ナリ
レバ李ハ露國公使ヲ調停シテ奇貨トシ竊カニ之ニ平和ヲ談判ヲ依頼シタ
ルハ是並ニ經歴上照シハ生ノ信シ難ハサル所ナリ唯本邦ニモ最初
ノ決心ヲ翻サス斷乎トモ多動カサレハ開戦ノ遂アル可カランカ
今ヤ當地ノ諸官衙ハ日ニ益々嚴密ヲ加ヘ機密事務ハ統辦類ノ之
ヲ扱ヒ易ト爲レタ之ヲ窺フヲ得ズ探偵ハ時々出没シ内外人ノ行處ヲ
損察シ電信モ亦テ故舊ノノ監視ヲ延ハス而シテ北洋駐紮ノ軍隊ハ

出師準備リ余ニ樞要地區ニ威嚴全ク布キ軍需糧秣ヲ用意シ
一令ノ下直ニ運動リ船ノ準備ニ汲々リ北洋所屬ノ各艦隊ハ軍需運
轉ニ從事スル諸艦ヲ除ク外從來朝鮮其他ニ分遣シタルモノ悉ク糾
合シ威海衛ノ軍港地ニ集メ優勢ノ艦隊ヲ編制シ一斉ニ運動ヲナシ
一舉ニ効ヲ奏セント欲スルモノ如モハ生現時キ邦艦隊如何ニ運動ヲ
ナシ居ルヤハ未タ詳セズト雖民風詳ニミテ真ナラバ仁川ニ止マル意ソノ
他ハ皆佐世保ニ集ムルガ如シ果シテ此ナラバ一朝和議敗レ威海ノ艦隊直
ニ仁川ニ駛スルカ如キアラバ佐世保威海ノ距離遠近ノ差ナリ仁川ノ勢
力ノ比較ヲ失ハシテ慮ルナリ因テ情報ハ日ニ益々切迫ス赴キ銘軍艦隊ハ
出奔セント志盛軍力穀軍亦時ニ悉セントナリ
當地ハ自下霖雨ノ候ナリ快晴ノ日頗稀ニミテ暑氣ハ日ニ上騰シ鐵路ハ
出水ノ際破壊ヲ来タシ電報モ亦不通トナル多ク交通ノ不便鮮ヤラズ加之
ナラズ道路泥濘ニミテ軍隊ノ運動上右モ困難ヲ感スル秋ナリ殊ニ人心ノ動

揺末々定ッラズ軍隊中ニモ間、不平ノ語ヲ漏洩スルモノアルヲ聞ク機棄
スベキハ將ニ今日ニヤリ茲巡時日ヲ経過シ彼ヲシテ基礎ヲ堅固ナラシムガ
如キ策ノ得タルモノニ非ス故ニ曰ク連戦ヲニ制アリト

(在天津ハルハ新聞)

0031



軍三(ノ)

明治三十七年七月十日

○清廷ノ意圖

一七月十四日午後六時四十分發東京、城村木大佐より川上中將宛
ウラガク大佐(此名ハ德義上秘密ニセウシタ)天津より來ハ秘密ノ
話ノ據ハ支那ノ平戰兩説ノ首唱者ハ下官等ノ是ヲ聞ク所ト
與ナリ皇帝ト輿論ハ戰ヲ主張シ總理衙門ハ英獨ノ忠告ヲ容
シ平和ニ盡カシツクリ李鴻章ノ内意ハ寧ロ平和ヲ望ムカ如シ平
戰未タ決セザル間ハ重キニ從フハ理ノ然ラレハ所ニシテ李鴻章ハ皇
帝ト輿論ニ從ヒ出師準備ヲ為スモノナリト在ハ神尾ニ問合中

大木 啓

0033

日記 二十七年七月二十日

○大島公使、決意

七月二十日大島公使、決意、小官ニ協議あり、即チ今國我政府、方針確定シ、當國ノ事、固シハ一、辱職ニ委任アリ、今後我カ排ル所ノ政略ヲ、懸慮スルニ到底我ハ免ルヘカラスト決意アリ、依テ貴公使、本旨ヲ仁川在港ノ、重山艦長ニ通シ、用我報答、任務ヲ、全カシメ、シテ、希望ス云々

此ノ午前、大島公使、仁川下リ、予ハ、重山艦長ニ公使ノ意ヲ通ス、而シテ、今後用我、塔倉ニ至ラハ、又、海陸兩軍ノ、交渉事項、ハ、豫メ、察セシメ、シテ、仁川ニ駐ル

軍三ノ

明治三十七年七月二十五日

○自清ノ文書

一七月二十五日京城より郵送二十八日午前二時四十五分釜山より接電大馬
公使より外務大臣宛

外務省轉より本使に公文ヲ送り本使に請ふに朝鮮政府に
代り釜山に在る清兵ヲ撤退せしむ可き事ヲ以テあり

大本營

0035

電臺の

七月廿一日

○大島公使増兵ノ請求

仁川 室田總領事

大島公使ヨリ在ノ通電報アリ

本使カ受取タル報告ニヨリハ清國ハ已ニ牙山ヘ向ケ三千ノ兵ヲ送り尙ホ
多数ノ兵負テ朝鮮ヘ派遣スル模様ナリ就テハ日本ニ於テモ朝鮮
駐屯ノ兵數ヲ増サレシムラ切望ス

大本營

0036

青

(1)

八月二日

○清帝ノ開戦宣告文新聞紙ニ登ル

上海
青本

二日 清國皇帝ノ開戦宣告文新聞紙ニ登載セラル

大本
營

0037

(1)

廿七年十月一日

本年八月二十六日日朝西國間ニ訂結相成り元西國盟約ハ本
 月十日我官報ニ登載お事ハ在馬更知ノ義ト存ルニ處
 其漢文ハ朝鮮政府陰曆八月十七日官報ニ登載有之リ
 茲ニ右官報及馬道附リ朝鮮地方官報ニ登載有之リ
 趣意ヲ了解セザンモノ有之リハ右官報ニ示シお事ハ在馬
 法政比段候ヲ申進也

明治廿七年十月一日

朝鮮

特命上機使大島圭久

聯合艦隊司令長官海軍中將伊藤了俊

大木 啓